

□海外文献紹介□

**潰瘍性大腸炎に対する直腸結腸
切除術が原発性硬化性胆管炎の
自然史に及ぼす影響**

Effect of proctocolectomy for chronic ulcerative colitis on the natural history of primary sclerosing cholangitis: Cangemi JR, et al (Gastroenterology 96: 790-794, 1989)

原発性硬化性胆管炎(以下PSC)は原因不明の慢性の胆汁うっ滞症で胆管の線維性閉塞が特徴的であり、しばしば潰瘍性大腸炎(以下UC)を合併する。PSCとUCの両者に罹患した患者に対する直腸結腸切除術がPSCの自然史に及ぼす影響は知られていないが、PSCの効果的な内科療法がない現在、直腸結腸切除

術がPSCに対しても効果があるかどうかを明らかにすることは重要である。

著者らはUCとPSCの両者に罹患した45人の患者を、直腸結腸切除術を受けた20人と受けなかった25人に分け、臨床所見、血液生化学所見、胆管造影像および肝組織所見の進行度についてprospectiveに検討した。この2群は最初、臨床所見、血液生化学所見、胆管造影像および肝組織所見は同様であった。すべての患者が最低1年間経過観察され、全経過観察期間は両者とも同じ(4.1 vs 3.9年)であった。肝脾腫、食道静脈瘤、腹水の新たな出現は2群に差がなく、ビリルビンやプロトロンビン時間やアルブミンにも差が

なく、肝組織所見や胆管造影所見も変わりなかった。直腸結腸切除術は生存率にも影響が認められなかった。

著者らはPSCを合併したUCに対する直腸結腸切除術はPSCに対して有利な効果をもたらさないと結論している。UCが内科的治療に抵抗したり出血が続く場合、直腸結腸切除術は躊躇されるべきでないが、UCとPSCの両者に罹患した患者において直腸結腸切除術を受けた約半数が吻合部周囲の静脈瘤が発達し生命を脅かすほどの出血を来すことが報告されており、手術の決定は慎重であるべきである。

(愛知県がんセンター消化器内科

中村常哉 抄)